資　料　2

「指導力評価を検討するに当たっての当面の主な論点」について
指導力評価に関するワーキンググループ（第１回）で出された意見の概要

以下，「指導力評価を検討するに当たっての当面の主な論点」で取り上げている論点ごとに，指導力評価に関するワーキンググループ（第１回）で出された意見の概要を示す。

なお，本資料においては，これまでに日本語教育小委員会で取りまとめた成果物について，以下の表に示した略称を用いて示す。また，これらの成果物をまとめて「カリキュラム案等」と呼ぶ。

	日本語教育小委員会で取りまとめた成果物の名称	略称
①	「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について	カリキュラム案
②	「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 活用のためのガイドブック	ガイドブック
③	「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集	教材例集
④	「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価について	能力評価

（１）指導力評価の目的

【検討のポイント】
・第１回目で出た意見からは目的として挙がっていることは以下の二点。
　①カリキュラム案等を活用した日本語教育実施関係者が持つべき能力，資質，実践力を明らかにする。
　②地域における日本語教育実施関係者が持つべき能力，資質，実践力を明らかにする。
・評価対象者の違いなど，評価の体系によって目的も複数考えることが必要ではないか。

＜意見の概要＞

（１）カリキュラム案等を活用した日本語教育を実行する人たちが持つべき能力，資質，実践力は何かということを明らかにし，評価する。

（２）「生活者としての外国人」のための日本語教育の目的は「社会に参加する」，「社会の一員として自己実現を図っていく」というような言葉でまとめられると思うが，そのような日本語教育を行うことができる指導者を育て，評価していくことが大事であり，その能力アップを図るために評価する。

（３）外国人が自立して生活していくための日本語の学習を支える人材がどういう指導力を持つべきかということを評価する。

（４）プロや専門職として地域における日本語教育に携わっている（あるいはこれから携わろうとしている）者が何をすべきかを明らかにする。

（５）評価対象者の違いなど，評価の体系によって目的も複数考えることになるのではないか。

（２）評価者（だれが評価するか）

【検討のポイント】
・実際に活動している人の多様性を踏まえた上で，検討を行うことが必要。

＜意見の概要＞

（1）「カリキュラム案等を実行に移す人」を評価対象者とした場合，実行に移す人の属性や活動形態は多様であり，地域により様々な部局，職種，素質の人たちが関わり得ることから，現段階で誰が評価を行うのかということについては具体的な言及はなし。自己評価だけでなく，他者評価や学習者による評価があるのではないかといった意見のみ。

（３）評価対象者（だれを評価するか）

【検討のポイント】
・評価対象者として出た意見は大きく以下の６点に分類できる。

① カリキュラム案等を活用し，実行に移す人
② 地域日本語教育専門家
③ コーディネーター
④ ボランティア
⑤ 地域住民
⑥ 行政

・①～⑥のどの範囲を評価対象者とするのか，また①～⑥の違いにより，評価する内容や方法を変える必要があるかどうかについて検討が必要。
・「指導力」の定義と構成要素（知識，スキル，個人の資質等）を明らかにした上で，評価する内容を決めることが必要。
・「地域日本語教育専門家」「コーディネーター」「ボランティア」「専門職」「指導者」という用語について定義と相互の関係性の整理が必要。
・特にボランティアを評価対象者とするかどうかについて検討が必要。

＜意見の概要＞

１．カリキュラム案等を活用し，実行に移す人について

（1）これまでのカリキュラム案等について検討を行ってきたことの，さらに地域により日本語教育専門家やコーディネーター等の配置状況が異なる。有償か無償かを問わず，「カリキュラム案等を実行に移す人」とするのがよい。
（2）カリキュラム案等を実行する人を中核とし，その実行を支える人材まで範囲を広げる方がよい。

２．地域日本語教育専門家について

（1）対話やおしゃべりなどの交流を重視した日本語教育と専門家が関わる日本語教育を区別した上で，地域における日本語教育の専門性があり，教育，学習に関して責任を持つ立場の人を評価対象とすべきである。
（2）地域の日本語教育の専門家を対象とすべきであり，項目評価を行う際の観点や基準について網羅的，体系的なものを示すのがよい。
（3）地域日本語教育専門家は現状はいないかもしれないが，育つ・育てるべきであり，その参考となるようにその人が持つべき能力を示すことが大事である。
（4）まずは専門職の指導力評価について検討すべきだが，評価の対象はそこだけに留まらないと思われる。

３．コーディネーターについて

（1）地域における日本語教室を多文化共生のコミュニティとして捉えた場合，参加者をまとめるコーディネーターが必要であり，専門家として評価の対象とするのがよい。

（2）コーディネーターを対象とすべきであり，項目評価を行う際の観点や基準についても網羅的，体系的なものを示すのがよい。
（3）カリキュラム案の対象は「日本語教育のコーディネーター的役割を果たす人」であり，指導力評価の対象を「教える人」だけに限定しない方がよい。
（4）コーディネーターがいないところも多いが，育つ・育てるべきであり，その参考となるようにその人が持つべき能力を示すことが大事である。
（5）文化庁で行っている地域日本語教育コーディネーター研修のプログラムも参考にしながら，コーディネーターが持つべき資質や範囲について検討するのがよいのではないか。
（6）コーディネーターと言われる人たちがどういう力を持って何をすべきかということを検討すれば，一番大きな枠組みが見えてくるのではないか。

４．ボランティアについて

（1）ボランティア活動に参加するかどうかは本人の自由であり，周りが拒む理由はない。そもそもそういった活動に評価を持ちこむことはなじまないのではないか。
（2）活動に参加するに当たってボランティアに求められることはあるのかもしれないが，スキルを評価することはそもそもなじまないと思う。
（3）一般にボランティアと呼ばれる方は，経験値とか長年に渡るものを持って今まで活動していると思うが，これらの人々も自己評価を含めて，しっかりと振り返って評価すべき。
（4）自己評価も含めて評価をすべきであり，そういった評価を取り入れることで，ボランティア活動が社会の中で位置付けられるようにすべきではないか。
（5）指導力評価の検討結果をボランティアがどう受け止め，活用するかどうかはボランティアの自由とするのがよい。強制力を持たせるべきではない。
（6）ボランティアであっても，学びたい人に次のステップを示し，成長を促すことは大事ではないか。また，「日本人だから日本語を教えられる」というわけではない。
（7）ボランティアに求められることは，本小委員会ではなく，ボランティアに関する研究者に任せたり，ボランティアからボトムアップ的に上がってくるのを待つ方がよいのではないか。
（※本小委員会としては専門家やコーディネーターの部分に特化した議論をすべきである。）
（8）評価基準等を示した結果，「能力がないとボランティアをしてはいけない」となることは避けるべきである。自己成長のために参考となるものを作成するのがよいのではないか。
（9）ボランティアの人たちが「我々は専門家マイナス○○の存在です」と考えてしまうことは避けるべきである。ボランティアの人たちが自己点検できるものとするべき。
（１０）「ボランティア」と一括りにして議論をせずに，活動の内容や属性などを把握するための資料が必要なのではないか。
（１１）ボランティアの力の評価の範囲は専門家やコーディネーターと協働して活動できるかということに留めておいた方がよい。

５．地域住民について

（1）直接日本語教室に参加していなくても，外国人との接し方などについて，自分がすべきことを理解し，自信を持ってもらうためにもチェックリストのようなものを作成するのがよい。

６．行政について

（1）行政が外国人とどう接するかということも対象とした方がよい。

（４）評価の観点（何を評価するか）

【検討のポイント】
・能力や資質などを個人個人に求めるのか，それとも日本語教室や地域に備わっていればよいとするのか。

＜意見の概要＞
（1）専門家がどういう能力を持つべきか，どういうことをすべきかということを明らかにすべき。（ただし，すべて一人でしなければならないというわけではない）
（2）人間関係構築能力のような個人の資質についても評価の対象とするのか。
（3）カリキュラム案や教材例集を評価の観点に関連させると今後検討が進めやすいのではないか。
（4）現場を通して身に付ける能力について，どう評価するか検討が必要。
（5）「地域日本語教育専門家」，「システムコーディネーター」，「プログラムコーディネーター」，「ボランティア」などにより求められるものやその程度は大きく異なるのではないか。ボランティアも評価の対象として考えてよいが，ポートフォリオやチェックリストを作成するなど，自己チェックの度合いが強いものにするのがよいのではないか。
（6）指導力について，カリキュラム案等をうまく使うための力に限定しない方がいいだろう。
（7）「指導力」が狭い意味での日本語の指導力だけではなく，対人関係を築く力といったことを広く捉えれば「指導力」を支えるものになる。
（8）ボランティアにもいろいろなタイプがあるが，活動の向上に努めるための枠組みがあった方がよいのではないか。頼るべきところを示すことが大事。
（9）カリキュラム案等を使う能力を測る。

（５）評価の基準

【検討のポイント】
・基準を作成するのか，チェックリストやポートフォリオなど，振り返りを行う際の拠り所を作成するのか。

（６）評価の手続，方法

【検討のポイント】
・自己評価，他者評価とするのか。

（７）その他

（1）地域における日本語教育全体の中で，指導力の評価がどういう位置づけにあるのか，既に検討が終わった学習者評価と指導力評価以外にどのような評価があるのかということを意識した中で検討をすすめることが大事なのではないか。